背中合わせの二人

フィヨルド

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「かっちゃんがいない未来は、私の中にないんです」

「俺等の道を邪魔するモンは全部ぶっ殺す」

二人で支え合い、最高のヒーローに。それは5歳の頃に約束した、二人の夢だった。

圧倒的戦闘センスを持つ爆豪勝己が御柱桜と出合い、互いを高め合った結果……。

オールマイトさえ目を見張る程の圧倒的戦闘技術を身に付けた。

二人に触発されたＡ組クラスメイトは負けじと自らを高めていく。

主人公不在ダメな人は即ブラウザバッグです。デクは出てきません。

目次

#1 二人の道 ―――― 1
#2 力の結晶 ―――― 18
#3 髪の毛を食べる（個性の譲渡） 27
#4 韋駄天の一撃 ―――― 34
#5 市街地を蹂躙する金髪の少年 46
#6 スタートラインは快晴の空 51

#1　二人の道

早朝の海岸。
誰もいないはずのこの時間に、二つの人影があった。
「……シッ！」
金髪の少年が放つ掌底を、同じく美しい金髪を揺らす少女が顎を引き、眼前ギリギリで避ける。
反応が遅れたのではない。それは最小限の回避で最速の反撃に繋げるため。
そのまま右拳で少年の顎を刈り取りにかかるも、しっかりと左腕でガードされてしまう。一旦仕切り直しとばかりに互いに距離をとった。
常人なら目で追うのがやっとの高速戦闘。技術、駆け引き、フェイント、純粋なパワー、全てを余すことなく使った戦闘技術。二人のそれは、恐らくプロヒーローでも舌を巻くだろう。
見つめ、睨み、出方を伺い合う二人。
互いを高め合このトレーニングは、毎日の日課だった。

◇◇◇

事の始まりは中国軽慶市。発光する赤児が生まれたというニュースだった。以降、各地で『超常』は発見され、原因も判然としないまま時は流れる。

いつしか『超常』は『日常』に……。

架空（ゆめ）は現実に。

世界総人口の約八割が何らかの『特異体質』である超人社会となった現在、混沌渦巻く世の中で、かつて誰もが空想し憧れた一つの職業が脚光を浴びていた。

「かっちゃんはひどいです。学校前にやけどするところでした。私の個性、自分にはなんにもできないの知ってますよね？」

「うっせ知っとるわ。大体当たんないようにしてたんだから平気だろ。ウダウダいってんじゃねえ」

金髪の少女は口に手をあて微笑む。

その綺麗な微笑みに教室の何人かが目を奪われるが、金髪の少年が睨みをきかせると

慌てたようにそっぽを向いた。
「もう。ほんとは優しいところもあるんですから、みんなにもそうしたらいいのに……ヴィランっぽいヒーローランキング載っちゃいますよ？」
金髪の少年のそんな一面にも好感をもっていたりする少女だが、彼がヒーロー志望だということもあり、心配もしている。
その時、教室の扉を開けて教師が入ってきた。
少年は、余計なお世話だ。と言わんばかりに後ろ手に手をヒラヒラと振り、自分の席へと戻って行く。
背負っていた自分の背より大きいケースを教室の隅に置き、少女も自分の席へと戻った。

◇◇◇

「えー、お前らも三年ということで、本格的に将来を考えていく時期だ！」
その言葉に教室のほぼ全員は、どこか雰囲気が変わる。

「今から進路希望のプリントを配るが皆!!　……だいたいヒーロー科志望だよね」
教卓で話す教師は持ってきたプリントの山を手に取り、パッと投げ捨てた。
途端に賑やかになる教室をなだめるように教師は全員に注意する。
「うんうん皆良い個性だ！　でも校内で個性発動は原則禁止な！」
髪の毛を尖らせる者、手から風を出す者、物を浮かす者。様々な個性が教室内を埋め尽くす中で、机に方足を乗せていた金髪の少年が声を上げた。
「せんせぇー、『皆』とか一緒くたにすんなよ！　俺達はこんな没個性共と仲良く底辺なんざいかねーよ」
「そりゃねーだろカツキ!!!」
「モブがモブらしくうっせー!!!」
「あー確か爆豪は……『雄英高』志望だったな」
その教師の言葉に賑やかだった教室は一旦静まり、別の意味のざわめきが広がった。
「国立の!?　今年偏差値７９だぞ!!?」
「倍率も毎度やべーんだろ!?」
そのざわめきを一括するように金髪の少年――爆豪勝己は机の上に乗り、言い放つ。
「そのざわざわがモブたる所以だ！　模試じゃＡ判定!!　俺達はウチ唯一の雄英圏内！」

手のひらを上に向け、顔を上げ続ける。
「あのオールマイトをも超えて俺はトップヒーローとなり!!　必ずや高額納税者ランキングに名を刻むのだ!!!」
「なぁ、さっきから俺達って言ってるってことは……」
うむ。と教師は満足そうに頷く。
「勿論、御柱(みはしら)も雄英志望だ」
「あはは……」
途端に注目が爆豪から自分に移った金髪の少女――御柱桜は少し頬を赤く染め、指でかいた。
「『女神』もか!」
「でも……二人ならいける気がするぜ!」
「たりめーだクソモブが!」
『女神』とは彼女、桜の面倒見の良さ、更に時折見せる慈愛を含んだような微笑みからつけられた渾名だ。爆豪といつも一緒にいるため、それが更に際立つ。
パンパンと手を叩いて教師が皆を静かにさせる。
「この一年、二人を見習って皆も頑張るんだぞ。進路希望のプリントは、今週中に提出してくれな」

そう言うと、教室に散らばったプリントを拾い始めた。
すぐに率先して共にプリントを拾いに行く御柱を見て、自らもとプリントを拾う、端から見て誰でも分かるような下心丸出しの男達。
「わあ！　手伝ってくれるんですか？　ありがとうございます」
再び見せた女神の純粋な笑顔に、下心を出した男達は罪悪感にかられたという。

◇◇◇

「おい桜、帰んぞ」
「ごめんかっちゃん。今日先生のお手伝いと、一年生オリエンテーションの説明とか……」
「チッ。わーったよ」
はよ終わらせてこいよ。と残し爆豪は去って行った。
よくあることだった。桜はかなりのお人好しの性格なので、頼まれたことはそう断らない。人望も厚く、任されたことはテキパキとこなす。そんな桜に頼る人は大勢いるわ

けだ。

「(自分でやろうとしねぇで桜に頼りっきりなのがムカつくんだよクソが)」

そう思う爆豪自身、以前桜を手伝ったことがあるのだが……彼の性格上、それはなかなか難しいことだった。

年下にキレたり、年下を睨んだり、最後は泣かせてしまったのだ。

桜がいたからどうにかなったものの、それ以降爆豪はプリント整理、力仕事以外は手伝わないようにしている。

そして今日は年下が絡むときた。がさつな性格ながら自己分析ができている彼は、おとなしく帰路についた。

◇◇◇

あのヘドロヴィラン……!

活動限界さえきてなければ私が……!

◇◇◇

「お、終わりました～早くしなきゃかっちゃんに怒られちゃいますね」
私は手伝いを終え、教室に戻った。
置いておいたカバンと、隅に立て掛けておいた自分の背より大きなケースを背負い、学校を出る。
放課後はかっちゃんの家で一緒に勉強したり、朝に組手をしていた海岸で個性の特訓をしていたりするんだけど……今日はそんなに長くできないかもしれない。
海岸にある大量のゴミを、かっちゃんの爆破で塵にしてできた円形に広がる場所だ。
全ては今年の雄英高校受験のため。……そして。
二人で最高のヒーローになるために。
と、その時。
『田等院商店街』とかかれているゲートの前に、人だかりができているのが見えた。
なんだろう。と自然にその方向に足を運ぶと、人だかりの奥から爆発音が響いてきた。
その音を耳にし、思考が止まる。

なんで……先に帰ったはずじゃ。
家にいるはずじゃ……。
瞬間、『なんで』に埋め尽くされた思考から抜け出した私は……走った。
人混みをかき分け、懸命に前に出る。
うそ、うそ……だってこの爆発音は。
子供の頃から何度も聞いてきた……幼なじみ（かっちゃん）の爆破の音だった。
人混みの最前列に出た私は目にする。
ボロボロに破壊された商店街、燃え上がる火の手、そして。
流動体のようなヴィランに捕らわれる、かっちゃんを。
私は走りながら背のケースを開け、人混みを抜けて走り続けた。
「馬鹿ヤロー!!　止まれ!!　止まれ!!」
後ろからプロヒーローが私を止める声や、知らない人の悲鳴も聞こえたが、関係ない。
私は、腹の底から幼なじみの名前を呼んだ。
「かっちゃん！」
待ってて。
今、助けますから。

◇◇◇

油断してたかと問われれば肯定する他ないが、後ろからの突然の奇襲は予想外だった。お陰でこのザマだ。

俺は体の自由がだんだんと奪われていくの感じていた。流動体のヴィランが口から侵入していき、呼吸すらままならない。

なんのために今まで特訓をしてきた？　ヴィランを目の前にしてこれではまるで意味がない。

俺の爆破のせいで周りのヒーローが攻めあぐねているのも分かる。だが、爆破を止めればすぐにでも体の主導権を握られるだろう。

もう打つ手は無いのか。そうらしくもなく諦めが頭をよぎったその時。

「かっちゃん！」

大きな旗を両手に持ちこちらへ向かっている金髪の少女の叫びが聞こえた。

その顔は今にも泣き出しそうで。

――なに、してんだよ。

その顔を見た途端に頭には……沸々と怒りが沸いてきていた。
――ふざけんなよ……！
何年も前、彼女を守るヒーローになると誓った約束を思い出して。
――なにやってんだよ！　俺は！
心の中で叫ぶ想いに呼応するように、過去の情景が頭を支配する。自分への怒りで頭が埋め尽くされた時、頭から余計な焦りが消えた。
向かってくる桜、それを止めるヒーロー。視界すべての景色がスローモーションのように感じる。
――もう泣かせないと誓ったはずなのに……なにしてんだ俺は。
全部終わったら、柄でもないが……謝ろう。
徐々に体を支配していくヴィランをよそにそんなことを考え、手のひらに意識を集中させていく。
今俺にできる最大火力。
桜を泣かせる原因がこのヴィランにあるなら。
俺達の道の上にこのヘドロ野郎がいて、邪魔してくるなら！
欠片残さず爆破して、ぶっ殺して！　そして最後に俺が残ってるなら……俺の勝ちだ!!

瞬間、起爆。
商店街に閃光が弾け、轟音が響き渡った。

◇◇◇

突如起こった大爆発に、その場にいた全員が腕で顔を覆う。
桜は前方に幾何学模様が描かれた障壁を張り、市民に被害がでないようにした。
徐々に煙が晴れて視界が鮮明になる。
ヘドロが暴れまわっていた場所には大きなクレーターができ、その中心には不機嫌そうな顔をした少年が一人。
彼に絡み付いていたヘドロはそこら中に散らばっていた。
「ケッ」
爆豪は手をポケットに突っ込み、桜の元に歩き出す。
――ああ。やっぱりかっちゃんは、ヒーローです。
最高にカッコいい、私のヒーロー。

爆豪に駆け寄り発した桜の言葉は思いの外元気だった。
「かっちゃんなら平気だって信じてたよ。　強いもんね」
いつもと変わらない微笑みで。しかし爆豪は腫れている若干充血した目と涙の後を見逃しはしなかった。
「なんだ、悪かっ――」
「おおーい！　大丈夫か!?」
爆豪の言葉を意図せず遮ったプロヒーロー。二人の無事の確認と、ヘドロの回収に来たのだろう。
「？」
なにかを言いかけていた爆豪に首を傾げる桜だったが、
「なんでもねぇ」
それに対し彼は素っ気なく返事をするにとどめる。
そこから桜は少しプロヒーローに説教をもらった。
「君が危険を犯す必要は全くなかったんだ!!　……ただまあ……」
一つ咳払いをし、続ける。
「最後のバリアーは見事だったよ。二人とも、大きくなったら是非ウチの相棒（サイドキック）にきてくれな！」

説教は少しだけ。「もっと自分を大切にな！」と言い、プロヒーローは去って行った。
そこから警察に少し事情を聞かれたが、今回は正当防衛が認められたこともあり、桜達はすぐに帰宅の許可をもらうことができた。

◇◇◇

夕焼けに赤く染まる帰り道。二人で家に向かう途中、爆豪は呟いた。
「悪かったな」
「え……？」
「さっき言いかけた事だよ！」
桜は突然の事に一瞬ポカンとするが、すぐさま思い出す。
「ああ！　そっか、かっちゃんが謝るなんて珍しいですね……少し得した……気分、かな……」
「何が得した気分だクソ……？」
少し先を歩き、桜の言葉に振り返った爆豪は目を見開いた。

彼女が声を出さずに、泣いていたのだ。
いつもの丁寧な口調は崩れ、女神といわれる笑顔をぐちゃぐちゃにして。
「ううん……全然得なんかじゃないやっ……。だって、だっ……て死んじゃうかと思ったんだもん！」
ごめんね、信じてたなんて、嘘。と。
「信じたかったけど、もしいなくなっちゃったらって！　そう考えたら……っ!?」
その言葉を聞き爆豪は。
涙で濡らした彼女の顔を拭いてやり、優しく頭に手を置いた。
「っ!?」
「悪ぃ。お前を助けるとか言っときながら、助けられちまった……」
「うん……」
我慢していたのだろう。爆豪の前では泣かない、と。
しかし突然彼から謝られ、その感情が決壊した。
「ごめんね、ヒーローになりたいのに、かっちゃんの隣にいたいのに……こんな弱くて」
「躊躇なくヴィランに飛び込める奴が弱いわけねぇだろ」
「……ありがと」
そこから暫くの無言、気まずい沈黙が流れる。

爆豪自身こんなことをするのは初めてなので、手を置いたはいいが、その後を考えていなかったのだ。
どうしたものかと視線をさ迷わせていると、忍び笑いが聞こえてきた。
「ふふっ……」
ふと視線を戻すと、桜はいつもの笑顔に戻っていた。
「ありがとうございます。もう大丈夫です」
右の手の甲で涙を拭い、いつもの丁寧な口調で言うと爆豪の先を歩き出す。
「俺の心配返せよクソが」
「うんうんいつも通りのかっちゃんですね。そうでなくちゃ。……て言うか心配、してくれたんですか?」
「んなもんしてねぇ!」
「ふふふ……」
手を口にあて笑う桜。
二人が目指すのは、爆豪が桜を守り、また桜も爆豪を守る背中合わせのヒーロー。

そんな二人の道に、突然一人の筋肉が乱入してきた。

角を曲がろうとしたその時だ。

「私が来た！」

Ｎｏ．１ヒーロー、オールマイトが二人の前に現れたのは。

＃２　力の結晶

「私が来た！」
憧れの存在オールマイトが突然目の前に現れ、何が起きたか分からない。というように立ち尽くす二人。
筋肉を強調するポーズをとったまま様子を伺うオールマイトを認識し、沈黙を破ったのは桜だった。
「か、かかかっちゃん！　お、オールマイトですオールマイト！　そ、そうだサイン貰わなきゃ」
いつも微笑みを浮かべ、冷静に物事を俯瞰できる桜にしては珍しい反応だ。
それもそのはず。二人はオールマイトが出演している番組を何度も見返すのは当たり前。オールマイトがゲスト出演した、「Ｐｒｅｓｅｎｔ　ＭＩＣのぷちゃへんざレディオ」公開収録の当落発表日などは、かなりピリピリしていたものだ。倍率は１５００倍で、勿論落ちた。
「お、おう」
爆豪は桜の呼び掛けにそう答えるのがやっとだった。

「かっちゃんしっかりしてください」と桜が声をかけ続ける中で、オールマイトが徐々に煙に包まれ始めていることに二人は気がつかない。
桜の呼び掛けにやっと反応した爆豪が見たのは、
「お、オールマイ……誰だこのクソ骨は！」
「語彙が辛辣だな！」
「なにいってんですかかっちゃん、そこにオール……え？　ええ!?」
「私がオールマイトさ」
尋常じゃない量の血を吐き出しながらグッ、と親指を立てる自称オールマイト。
「あ、最近はやってるオールマイトの物真似芸人ですか……？　近くで見ると結構似てるものですね」
「本物だからね！」
そういいながら自称オールマイトは自信が着ている服をめくりあげた。
「っ！」
「急に現れたのだから、疑うのも無理はない……少し昔の話だ」
そこから桜達が聞かされたのは想像を絶する話だった。
五年前の怪我による呼吸器官半壊、胃袋全摘出。オールマイトに残された活動時間は三時間を切っているとのこと。その話を聞いた二人は思わず言葉を失った。

「そんな……」
「急にこんな話をしてすまないね」
「んで、なんでオールマイトが俺達の前に来たんだ？」
冷静さを取り戻した爆豪は、桜も気になっていた疑問を口にする。
それを聞いたオールマイトは両手を広げ、再び口を開く。
「そう、ここからが本題。……私の個性の話だ」
「オールマイトの……」
「個性……」
オールマイトはうむ、と頷く。
「そう。私の個性、君達は受け継ぐに値すると感じた」
「オールマイトの個性を……受け継ぐ？」
爆豪は目を細めた。
「私の個性は、聖火のごとく受け継がれてきた個性なのだ」
そして次は君達の番というわけだ。と。
誰も知らない事実を知り、桜と爆豪は固まる。インタビューではジョークで誤魔化しているオールマイトの秘密。二人が子供の頃はよく個性の予想をしたものだ。
「個性を譲渡する個性……それが私の受け継いだ個性！　冠された名は『ワン・フォー・

オール』

一人が力を培い、その力を次に託し。そして出来上がった力の結晶。

桜はその話を聞き、内心唖然としながら疑問を口にする。

「あの……なんで私達なんですか？」

「そうだね……私は、さっきのヴィランとの戦いを見ていたよ。情けないことにね、この体じゃあ何もできない」

桜の疑問に、自嘲するように首を振るオールマイト。

視線を桜に向ける。

「躊躇なく飛び出す君を見ていたよ」

そう言い、今度は爆豪を見る。

「飛び出した少女を見た君の目を私は見ていた」

そして一息つき、再び口を開く。

「プロヒーローが手を出せない中飛び込んだ君が。それを見て急に力を上げヴィランを吹き飛ばした君が……あの中で誰よりもヒーローだった」

憧れのＮｏ．１ヒーローにそう言われたのだ。表情には出さないが、二人は内心とても嬉しかった。

「大体こんなところさ。どうだい……私の個性、受け継いでみる気はあるか少年少女？」

君達はヒーローだと言われたのだ。二人に断る理由など、どこにもない。
「はい！」
「たりめーだ！」
「即答か……そう来てくれると思ったぜ！」

◇◇◇

だが……とオールマイトは続ける。
「個性を受け継げるのは一人なんだ……君達のどちらかとなってしまう」
申し訳なさそうに言うオールマイトに、爆豪は答える。
「んなことは予想ついてる……受け継ぐのは桜だ」
チラリと桜に視線をやる。
「え、ええ!?　わ、私でいいんですか？」
「いいも何も……桜は自分じゃほとんど何もできなねぇが、ワン・フォー・オールと相性抜群だろぉが」

「そうですけど……いいんですか？」
「あ？　何がだよ」
「だって……オールマイトの個性ですよ？　かっちゃんも受け継ぎたいですよね？」
構わねぇ。と爆豪は小さく首を振る。
「桜は危なっかしいんだよ。さっきのヴィランの時も突っ込んできただろ……」
「で、でも！」
食い下がる桜に爆豪は、はぁ。と大きなため息をついた。
「そんなに言うんなら……半分貸せ。出来るだろ？」
「そっか！　……わかりました。そうしましょう」
「ち、ちょっと待ってくれ。話が見えないんだが……ワン・フォー・オールと相性抜群？　貸す？　君達の個性はなんなんだ？」
慌てたように二人の話に割り込むオールマイト。どうやら二人の話についてこれてなかったらしい。
爆豪の個性はヘドロの時に見ていたが、桜の個性はバリアーのようなものを出したことしか知らないのだ。オールマイトにとっては当たり前かもしれない。
「すいません……置いてけぼりにしてしまいましたね」
桜の謝罪の後、爆豪が口を開いた。

「俺の個性は見た通り『爆破』だ……桜」
　そのまま自分の個性の説明をするよう桜に促す。
「私の個性は『御旗（みはた）』です」
「御旗？」
　オールマイトが細い首をかしげる。
　それを見た桜は、背負っていたケースから巨大な旗を取り出した。
「これは……飛び出した時に持っていた旗か。改めて見ると大きいな」
　取り出した旗は桜より頭二つ分大きいものだった。
　旗の布部分は細長く、後方は二股に分かれており、金色で縁取られ中は金と青の刺繍が施されている。
　柄の先端は槍の様に鋭く尖っていた。
「はい。この御旗を地面に突き立てることで、自分以外の他人の身体能力、個性を強化できるんです。それと障壁も張れます」
今は亡き母の個性『応援』と、同じく父の個性『幸運』の複合型。
　この大きな御旗は桜にとって、両親の形見の様なものだった。
「他人の個性を強化する!?　そんな個性が…それで、貸すというのは？」
　オールマイトは深く頷き話の根幹を桜に問う。

「この個性は御旗の力を他人に貸すものなんですが、個性は体の一部と言われていますよね。事実、この御旗も同じで、私の成長と共に伸長しているんです」

四歳で個性が発現した時の御旗はその時の桜の背の半分くらいしかなかった。

そして今に至るまでに自身と共に成長したのだ。もちろん他人に貸す力――御旗の内包する力の大きさも一緒に。

つまり、御旗を桜の一部と捉えるのなら、この個性は桜に内包する力を他人に貸し与えるものということになる。

桜に内包する力。それは、ワン・フォー・オールでさえも例外ではない。

「つまり、私自身の力を他人に貸すというのは、私の個性もまた然り。ということです」

桜が一度切り、爆豪が説明を引き継ぐ。

「そう言うことだオールマイト。桜がワン・フォー・オールを引き継いで半分の力を俺に渡してもらう。桜も戦えはするが……あくまで俺が前に出て桜が後方支援。それなら俺らの個性を最大限に生かせる」

「成る程……そんなことができるのか。……分かった。あと、一つだけ約束してくれ」

オールマイトは感心したように頷いた後、人差し指を立て、真剣な表情になる。

「なんですか?」

「ワン・フォーオールの貸し借りは……君達の間だけにしてくれ」

「それなら大丈夫です。世間に公表しないような秘密ですもんね。貸しませんし、オールマイトの秘密も誰にもいいません……ですよね、かっちゃん」
「ああ」
　それを聞いたオールマイトは安心したように頬を緩めた。……肉はほとんどついていないが。
「そうか！　なら早速、明日携帯に送る場所に来てくれ！　もう遅くなってしまうし、続きはその時にしよう……だから……」
　そう言ってオールマイトはポケットからスマホを取り出した。
「ＩＤ、交換しよ？」

#3　髪の毛を食べる（個性の譲渡）

市営多古場海浜公園。
海流の流れによりこの海岸は漂着物が多く、それにつけ込んでゴミの不法投棄が多い場所だ。
美しかった海岸線はゴミで埋まり、いつしか市民は誰も寄り付かなくなった。
しかし、そこは誰も寄り付かないが故に個性を使ってもバレにくく、桜と爆豪の特訓場所ともなっていた。
「驚きましたねかっちゃん。まさかオールマイトに指定された場所がいつもの場所だったなんて」
「こんなゴミ溜めで何すんのか知らねぇが、取り敢えず……」
「はい。やりましょうか」
桜がふわりと微笑んだ次の瞬間。
二人は互いに距離をとり、構える。
桜の表情には『女神』と冠された微笑みの面影は既に無く、真剣そのもの。対する爆豪は、それを見てニヤリと口を歪ませた。

現在の時刻は四時半。
オールマイトとの待ち合わせの時間まで、後三十分。

◇◇◇

オールマイトは驚きに目を見開いて二人の組手を見ていた。
二人が組手を始めてから二十五分後、待ち合わせの五分前に海岸に来た彼は、今巨大な冷蔵庫の影に隠れている。
二人の邪魔をしたく無いのと出方を見失っていたのもあり、どうしたものかと頭を悩ませる。
しかし、見れば見るほど二人のそれが洗練された戦闘技術だと分かった。
一見大雑把に見えるが、時折フェイントを挟み込み、見切られてしまう様な同じ攻め方はせず、一挙一動を全て次の攻撃の威力に変えている爆豪。
それを相手取るのは、彼の強烈な攻撃を柳に風というように受け流し、時折隙を見て反撃をする桜。歴戦のオールマイトでさえも『美しい』という言葉が頭をよぎる。

オールマイト二人を見て、思わず表情筋がつり上げた。
彼は一旦距離をとった二人を見て、マッスルフォームに姿を戻し声をかけることにした。
「私が早朝の海岸に来た！　おはよう爆豪少年、桜少女！」
「あ、おはようございますオールマイト。ほら、かっちゃんも」
「ああ!?　んなもんわざわざしねぇよ。　さっきからゴミの後ろでこそこそしやがって」
「あ？　ばれてた？　あと、三人だけのときは八木さんで頼むぜ！」
そう言って煙を出し、トゥルーフォームに戻るオールマイト。
「見ていたよ二人とも。凄いじゃないか！　おじさん君達がそんなに戦えるなんて思っても無かったよ。これなら心配も要らないな！」
「心配……とは、なんでしょうか」
「ああそれはね、『ワン・フォー・オール』はいわば、何人もの極まれし身体能力が一つに収束されたもの。生半可な身体では受け取りきれず、四肢がもげ爆散してしまうんだ！」
「はぁ!?　爆……って、桜は大丈夫なのかよ！」
オールマイトから発せられた衝撃の言葉に爆豪が声を荒げる。

それを見たオールマイトは人差し指を立て、左右に振る。
「本当だったらここのゴミ掃除をして、同時に私の個性を受け取れる身体を作ろうとしていたんだがね……。さっきのを見て、その心配は無いと確信したんだよ」
今度は桜を見て告げる。
「あれほどの動きをできる君なら、もう受け取れる身体は既にできてるってね！」
だから大丈夫！　と爆豪に向けて今度は親指を立てるオールマイト。
「そうかよ」
「そう！　だから早速、今日渡してしまいたいと思うよ」
「え？　急ですね」
「まあそうだな……君達、来年受験だろう？　どこ受けるんだい？」
爆豪と桜は一度顔を見合わせ、
「もちろん雄英です」
「雄英だ」
当たり前だと即答する。
「やっぱりそうか！　君達の実力ならもう心配ないと思うけど……どうせなら早いうちから使えるようになりたいだろう？」
その言葉に爆豪は好戦的な笑みを浮かべる。

「そうだな……どうせなら、俺は一位をとってやる」
もとからそのつもりだったがな。と言う爆豪にオールマイトは豪快に笑う。
「ＨＡ―ＨＡ―ＨＡ―ＨＡ!!　そうかい爆豪少年。実技試験の歴代最高得点は、私の２４８Ｐだ！　楽しみにしてるぜ？」
２４８Ｐ、それがどれ程凄いものかは分からない。
だが桜達と同じ時期のオールマイトとはいえ、相当なポイント数なのは容易に想像がつく。
「桜！　お前もだ。俺と勝負しろ！」
「ええ……まあいいですけど……」
「はっ！　没個性の奴等、良個性で胡座かいてる奴等、全員ぶっ殺してやるぜ！」
「冗談だろうが、ぶっ殺しちゃだめだからな？　ま、取り敢えず渡しちゃうか」
一旦話を区切り、オールマイトは桜に向かい合った。
「そう言えば、どうやって受け継ぐんですか？」
桜の疑問に、彼は「当然の質問だな！」と答えながら何故か髪の毛を一本抜いた。
「？」
「なに、要は簡単さ。私のＤＮＡを身体に取り込めばいいんだ」
そして抜いた髪の毛を桜に差し出す。

「というわけで……食え」
「え？　ええ……」
躊躇う桜にオールマイトは自分の髪の毛を押し付ける。端から見たらガリガリのおじさんが女子中学生に自分の髪の毛を食べろと強要している、なんとも危ない光景だ。
「ふざけんなオールマイト！　んな汚ねぇモン桜が食うわけねぇだろ！」
「な!?　失礼だな爆豪少年。髪の毛は毎日洗っていて綺麗だぞ」
「そういうことじゃねぇ！」

◇◇◇

時は過ぎ、二月中旬。
今日は雄英高校ヒーロー科の受験日。
私とかっちゃんは雄英高校の正門前に来ていました。
ワン・フォー・オールを受け取り（ちょっと酸っぱかったです……）、二人で５０％ずつ分けることはできたのですが、結局使えるようになったのはかっちゃんが２５％、私

が２０％程度まででした。それ以上は無理して使うと、骨に響いてくるのでまだ使えません。

それと、ワン・フォー・オールをもらってから私達の個性の成長が著しく速くなったのを感じたのですが……どうやらオールマイト自身無個性だったので、知らないらしいです。気のせいでしょうか？

ともかく、結局海岸のごみも綺麗にし、オールマイトから戦い方とワン・フォー・オールの制御方法を教わり、ついにこの時が来たわけです。

「おい桜、落ちたらぶっ殺すからな」

「大丈夫ですよかっちゃん。自分の心配はいいんですか？」

「はっ！　心配？　俺にはそんなもん必要ねぇ」

一見すると慢心。そのように見えてしまうかもしれません。

ですが、ずっと隣にいた私だから分かります。それは慢心なんかではなく、長い鍛練の果てに出来上がった自信だと。

「なら、大丈夫ですね」

「ああ」

私たちは校門を抜け、夢への一歩を踏み出しました。

回りから視線を集めていたようですが、何故でしょうか……？

＃4　韋駄天の一撃

「今日は俺のライヴにようこそー!!!　エヴィバディセイヘイ!!!」
　実技試験説明担当プレゼント・マイクのテンションとは裏腹に、会場は静まり返っていた。それもそのはず、一万人以上が集まるこの場で返事ができるほど神経の図太い人はなかなかいないだろう。そんな人でも空気を読んで返事はしないだろうが。
　返事がないのを気にもとめず、プレゼント・マイクは説明を続けていく。
　内容は十分間の模擬市街地演習。三種のロボヴィランを倒す、または行動不能にして、ポイントを稼いでいく方式のようだ。
「協力はさせない、ということですね」
「まあ、競い合うには丁度いいだろ」
「本当に勝負するんですね……」
　相変わらずプレゼント・マイクへの返事は無いが、桜の右前方の眼鏡をかけた少年が質問をしていた。なかなか神経の図太い人は意外と近くにいたらしい。
　それによると、三種のロボヴィランとは別に、倒しても利益のない、お邪魔虫がいるとのこと。

「有り難う御座います失礼致しました！」
　眼鏡をかけた少年は質問を済ませ、席につく。
「俺からは以上だ!!　最後にリスナーへ我が校の校訓をプレゼントしよう」
　身振り手振りを交え、一万人超の受験者に伝える。
「かの英雄ナポレオン＝ボナパルトは言った！『真の英雄とは、人生の不幸を乗り越えていく者』と！　……Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａ!!　それでは皆、良い受難を！」
　説明を終えると、プレゼント・マイクは去っていった。
　爆豪はバックを持ち、立ち上がりながら桜に話しかける。
「終わったら校門で待ってろよ」
「もう終わった後の話ですか？　て言うか、それは私のセリフですよね。たまにすぐ帰っちゃうじゃないですか……結構落ち込むんですからね……」
「うっせ。じゃ、後でな」
「はい。お互い頑張りましょうね」
　爆豪の背中を見送った桜は、自分の受ける会場へ行くバスのもとに小走りで向かった。

◇◇◇

「広いですね……」

バスから降りて目にした試験会場の広さに桜は思わず呟く。

これと同じ会場が他にあと六つあるというから驚きだ。

一万人以上の受験者が七つの試験会場で一斉に試験を始めるということは、一つの会場に少なくとも千五百人はいることになる。

これは予想以上のポイントの奪い合いになることを桜は予想し、大きな溜め息を吐く――のではなく、口を僅かに上へとつり上げた。

それはある意味当たり前のことでもあった。

桜自身は全く自覚していないようだが……何に対しても不敵に、好戦的に当たっていく爆豪の隣に十年もいるのだ。性格の一つや二つが影響していても何ら不思議ではない。

桜は右手に持つ御旗にワン・フォー・オールを込めた。そうすると全体が金色に淡く輝き、同色の粒子のようなものが溢れ始める。

その天から授かった御物のような神々しい見た目に、桜と同じ会場の受験者は目を奪

われていた。
と、その時。
「ハイ、スタートー！」
急な開始の合図に、人混みの中にいた桜は前に進むことが出来ず、ならばと旗の柄を地面に打ちつけ、入り口の上から市街地へ踊り出た。
「標的捕捉!!　ブッ殺――」
「かっちゃんみたいなロボットですね……ふふっ」
入り口から三十メートル程離れた場所に丁度いたロボヴィランの頭部を破壊し、着地した桜。幼なじみと同じようなことを言っているヴィランにクスリと笑いながら、次のヴィランへと走る。
「どうしたあ!?　実戦じゃカウントなんざねぇんだよ!!　走れ走れぇ!!　賽は投げられてんぞ!!?」
どうやら他の受験者はまだスタート地点にいるようだが……そんなことは桜には関係無い。
「ワン・フォー・オール、フルカウル２５％！」
全身にワン・フォー・オールを纏うことに爆豪が付けた名前だ。
御旗の先端にある鋭く尖った部分で近くにいた２ポイントヴィランの頭部をこれま

た一撃で破壊する。
頭部で受験者を認識しているなら……と、頭部と胴体の間接部分を的確に破壊していく桜。まるで狙ってくださいと言っているかのように長い間接部分だ。
着地地点の周りにいたヴィランを全て倒し合計８ポイント。
ようやく他の受験者が市街地に入ってきたところで、桜は次のヴィランへと御旗の尖端を振りかざした。

◇◇◇

「大丈夫ですか？」
「あ。は、はい！」
見知らぬ受験者に背後から迫る２ポイントヴィランの頭部を破壊し、行動不能にし、ニコリと問いかける桜。
困っている人、怪我をしそうな人を助けながらヴィランを破壊していく。そのせいで多少の時間ロスをしてしまったが、現在１０５ポイント。

ワン・フォー・オールを身に纏い、空中で障壁を足場代わりにして得た起動力、更に御旗のリーチ。それらを十全に使いヴィランを破壊、または目に入った危険な状態の人の援護をする。

次の標的へと御旗を構えたその時。

轟音。次いで、地面が揺れた。

音の方向へ顔を向けると、約五十メートル先に巨大なロボヴィランが建物を破壊しながら現れるのが見えた。

「あれが０ポイントヴィラン……思ってたより大きいですね」

桜は標的にしていたヴィランを破壊し、すぐに思考を切り替える。

逃走――ではなくどのように止めるか。

（ワン・フォー・オール２５％では多分倒すことは不可ですね……全力の１００％なら大丈夫でしょうけど……骨折程度では済まなそうですね……）

それはダメだ、というように首を振る。

（障壁ももつかどうか……）

現状、桜に０ポイントヴィランを確実に止める方法はない。

しかし、桜には引きたくない……いや、引けない理由があった。

無情にも彼女の横を次々と受験生が通りすぎていく。

――誰かいれば……私の個性で……！

今桜の隣に爆豪はいない。

もし誰もいないのなら、１００％もやむを得ないか……。

そう考えたその時。

「君も逃げなければ。危険だぞ！」

受験番号７１１１番。プレゼント・マイクに質問をしていた、眼鏡をかけている受験生が桜の肩を叩いた。

桜は彼の問いかけに否定を返す。

「ごめんなさい……私は逃げたくないです」

「何故⁉　早くしなければ、君も巻き込まれてしまうぞ！」

否定されるのは予想外だったのか、彼は強い声で言う。

しかし、それでも桜は首を横に振った。

「私は、もう逃げないって誓ったんです。今ここで逃げたら、きっといつかまた、自分に理不尽が立ちはだかった時も逃げてしまう気がするんです」

十年前のあの日。

泣きじゃくる桜に手を差し伸べた爆豪。
隣に居続ける為に。爆豪を支える為に。そしてどんなことがあっても二人で立ち向かうと決めた。
なら。
こんなところで、背中を向けるわけにはいかない。

「だから、私は逃げません」

力強く、いい放つ。
一瞬の静寂。受験者が逃げる中で、立ち止まる二人。
覚悟を決めている桜の目を見た眼鏡をかけた彼は、口を開いた。
「僕は……試験にとらわれて、ヒーローの本分を忘れていたよ……。僕に出来ることがあったら、是非言ってくれ！」
それを聞いた桜は真剣な表情を崩し、いつものように微笑んだ。
「ありがとうございます。でもすいません……あなたに頼りっきりになってしまいますが……」
「大丈夫だ！　遠慮無く何でも言ってくれ！」

間髪入れずに彼は答える。
少し躊躇するも、時間は有限だ。0ポイントヴィランは既に三十メートル先まで迫っていた。
「分かりました……では、いきます……！」
桜は右手に持っていた御旗を両手に持ち直し、トン。　と、静かに突き立てた。

「貴方(あなた)に、神の祝福を」

◇◇◇

突き立てた御旗を中心に、幾何学模様が描かれた円が拡がる。
円は道路の横幅一杯、直径十メートル程の大きさになった。
それだけでは終わらない。円の内側から光の粒子が溢れる様に湧き出てくる。

更に。
カーン。カーン。と。
どこからともなく鐘の音が聞こえてきた。
それはまるで光の粒子を溢れさせ、御旗を掲げる桜を祝福しているかのよう。
そのあまりにも現実離れした美しい姿に、隣にいる眼鏡をかけた受験者が。後方に逃れた受験者達が。モニタールームで受験を見守る雄英高校の教師達が。思わず目を奪われた。
そして、湧き出た大量の光の粒子が、眼鏡をかけた受験者に螺旋を描きながら収束していく。
最初は驚いていた彼だが、光の粒子が己の内に入っていくにつれて身体に力が蓄積されていくのを感じ、それが桜の個性だと理解した。
冷静さを取り戻した彼は金髪の少女に問う。
「僕の名前は飯田天哉。君の……名前を是非教えて欲しい」
地面から溢れた全ての光の粒子が、飯田の身体の中に収束した。
体全体が淡く輝き、時折黄色い稲妻がスパークする。
「私の名前は御柱桜です。後は、よろしくお願いします」

「ああ……！　任せてくれ！」

飯田は見上げる程巨大な０ポイントヴィランに向かって疾駆する。

一速、二速、三速、四速、五速、と、普段の何倍ものスピードでギアが上がっていく。

飯田はプレゼント・マイクの言葉を思い出していた。

――更に、向こうへ。

「レシプロバースト!!」

勢いよく踏み切り、普段ならあり得ない跳躍力をもって０ポイントヴィランに接近する。

飯田の目と、脚が。０ポイントヴィランの顔面を捕捉。

右脚を振りかぶり、狙いを定め、飯田は叫んだ。

「エクステンドオ!!!」

それは、女神の加護を得た、韋駄天の一撃。
光の尾を引く一撃が、炸裂する。

瞬間、轟音。

原型を留めない程に頭部を潰された０ポイントヴィランは倒れ……動かなくなった。

＃５　市街地を蹂躙する金髪の少年

その姿に、同試験会場の誰もが自分の憧憬を重ね合わせた。
誰もが困難だと思われた脅威に、己の身を犠牲にして果敢に立ち向かう者。
人はそれを、英雄（ヒーロー）と呼ぶ。
「終ー了ー!!!」
受験者達が呆然とする中、試験終了の合図がプレゼント・マイクによって言い渡された。
皆の視線の先、動かなくなった０ポイントヴィランの向こうに立つ飯田に金髪の少女が駆け寄っていく。
「ありがとうございます。凄いキックでしたね」
「いや、感謝すべきは僕だ。君の力があとてこそだったよ」
桜の言葉に飯田は謙遜を返す。
「お疲れ様～お疲れ様～。ハイハイ、ハリボーだよ……」
少し遠くから年老いた女性の声が聞こえる。おそらく雄英に勤めるヒーローの一人だろう。

「では、お互い頑張ったということにしましょう……私、待たせている人がいるので、先に失礼しますね」
「ああ。次は、四月に教室で会おう！」
「はい！」
互いに健闘を称え、再会を祈り、桜と飯田は別れた。
スタート地点に戻った桜は、ケースに御旗をしまおうとして　ふと気付く。
「あら　ケースに入りませんね　」
　纏っている光を見てふと思い出し、自然に身体に馴染んでいたワン・フォー・オールを解除すると、光は消え、御旗の大きさも元に戻った。
桜の頭に浮かんだのは、ワン・フォー・オールによる個性の成長。
　いえ、これはもう成長ではないのかもしれないですね。
桜は、今日飯田へ御旗の力を使った時、初対面にも関わらず、あのような絶大な破壊力が生まれた。
　桜の御旗は、支援対象との関係の深さ、または善し悪しによってその効力の大きさが変化する。
　全くの無関係の赤の他人にもそれなりの支援は出来るが　今回の力は、成長と言う一言で済ますには、あまりにも大きすぎた。

ワン・フォー・オールによって個性の成長が促される、そう予測していたのだが、実際は違うのかもしれない。
そんなことを考えながら、桜は元に戻った御旗をケースにしまい、雄英の校門へ行くバスへと乗った。

◇◇◇

試験開始が宣言された瞬間、入り口に固まり呆けている受験者達を目覚めさせたのは、耳を破壊するかと言う程の極大の爆発だった。
気付けば、集団から少し離れた後方にいた金髪の少年は姿を消していて、次いで市街地内前方から爆発音が聞こえる。
しかし既にそこには誰も居ず……あったのはロボヴィラン三体分の残骸だけだった。
爆発音が試験会場に響く度に、新たな鉄屑が生まれる。
受験者の目が追いきれない速度で次々とヴィランが破壊されていく。
「なんだよ……」

呆然と立ち尽くしていた一人が、呟いた。

「ほとんどなんも残ってねぇじゃねぇかよ！」

やっとヴィランを見つけたかと思いきや、次の瞬間に閃光が走り爆発音が響く。目を開くとヴィランは煙を上げ、焦げた臭いを発する鉄屑に変わっていた。

ポイントは有限。この試験会場の受験者のポイントは、一人を除いてほとんどが二桁に達していなかった。

残り時間は二分。追い討ちをかけるかのように現れる0ポイント（絶望）。

しかし、それを見て、好戦的に歪ませた口元を更に吊り上げる金髪の少年。

建物を破壊しながら進撃する0ポイントから、這いつくばるように必死に逃げ惑う受験者の背後で、これまでと比較にならないほどの閃光が弾けた。

「榴弾砲着弾（ハウザーインパクト）!!」

遅れて、轟音。

あまりの光に受験者は目を覆い、響き渡る特大の轟音に耳を塞ぐ。

光に焼かれた目が回復し、開くとそこには……。

上半身は吹き飛び、原型を全く留めていない0ポイントヴィランの姿があった。

圧倒的機動力、そして破壊力を併せ持つ、金髪の少年――。
爆豪勝己
ヴィランポイント　２４６
レスキューポイント　１６
合計　２６２
首席合格（備考：歴代一位）

御柱桜
ヴィランポイント１０５
レスキューポイント１００
合計　２０５
次席合格（備考：歴代三位）

＃6　スタートラインは快晴の空

「実技総合成績出ました」
　暗い部屋の中、モニターの光だけが辺りを照らしている。
　集まっているのは雄英高校教師陣。全員がプロヒーローである彼らは、今年の入試について話し合っていた。
「救助ポイント０で４位とはなぁ!!」
「後半他が鈍くなっていく中、個性を使って遠距離攻撃までこなす。タフネスの賜物だ。名前は……麗日お茶子」
　モニターには浮かせたロボヴィランを蹴り飛ばし、接触する直前で解除することで、３ポイントさえ一撃で破壊する少女の姿が映し出される。
「例年通りなら一位通過も出来たものを……今年は大豊作だな！」
「ああ……まさか０ポイントをブッ飛ばすのが二人も……いや、三人と言うべきか？」
「そうだなァ。てかよ、お前が救助ポイント満点出すなんてねぇ。つか初めてじゃね？　なぁイレイザー」
「御柱の行動は合理的だ。怪我人の対応、ヴィランの弱点を的確に突く一撃、それらに一

切の無駄が無い。飯田の順応力もなかなかだがな……」
何にせよ、とイレイザーと呼ばれた男は続ける。
「去年の奴等とは違う……少し期待してもいいかもしれん」
彼の言葉に、ネズミのようなシルエットが口を開く。
「今年は二人が圧倒的だったね」
同意するように頷く者、唸る者、無言を貫く者、様々だ。
しかし彼らは、やはり同様にモニターに映る一位と二位の受験者を見つめる。
「救助ポイント初の満点、御柱桜。そして歴代最高得点の爆豪勝己……本当に楽しみなのさ！」

◇◇◇

「行ってきます」
真新しい制服を身に付け、最後に仏壇にいる両親に挨拶を済ませた。
誰もいない家に桜の声だけが聞こえる。

両親が亡くなった後に引き取られた、仮の親に嫌われている訳ではない。むしろ、頻繁に連絡をくれ、生活に不備がでないように気を配ってくれる優しい人だ。

家にいないのは海外で働いているためで、毎月のお金は送ってもらっている。桜には少し多い気がしたが、その事を指摘すると「女の子なんだから、もう少し可愛くなりなさい」と言われた。本当に頭が上がらない。

雄英に合格したことを報告したときも、直接祝えないのを申し訳なく思っているのが電話越しでもわかった。

新調したローファーに足を入れ、トントン、と爪先で玄関口の床を鳴らす。ドアの前には既に腕組をさした爆豪が待っていた。

「遅えぞ」

「すいません……でも、女の子は準備に時間かかるんですよ？　クラスでそんなこと言ってたら友達できませんからね」

桜がからかうように爆豪に言うと、爆豪はいつもの調子で答える。

「はっ、知るかよ。そんなんでビビる奴とつるむなんて願い下げだな」

「もう……」

けれど、そんないつも通りが、私は好きだ。

空は雲ひとつない快晴。

さりげなく歩調を合わせてくれる爆豪に、桜は内心嬉しく思いながら駅へと向かった。

◇◇◇

「一緒のクラスでよかったですね」
「……そうかよ」
校舎入り口前に掲示されていたクラス表を見ると、『爆豪勝己』のすぐ下に『御柱桜』の名前があった。クラスはＡ。
あくまで不機嫌に装う爆豪の隣をご機嫌な様子で桜は歩いて行く。
「大きいですね……バリアフリーってことでしょうか」
「こんなデケェ奴と同じクラスは勘弁だがな」
そう言う勝己だが、桜がチラリと顔を伺うと……その口はほんの少しつり上がっていた。
「楽しみなんですか？」

「あ？　……まぁ否定はしねぇ」
巨大な教室の入り口を見て、二人が思ったことは同じだった。
それは。
これから一年間を過ごす教室。
全国から選ばれた者だけが集まる教室。
この中にどんな強い人(ヤツ)がいるのか、と。
隣にいる勝己の言葉に、自然と桜も笑みをうかべる。
入るぞ。と勝己に促され、桜は教室に入った。

◇◇◇

早く来すぎたのか、教室の中には誰もいなかった。
しかしすぐに続々とやってきて、教室の半分が埋まる。
その中には桜が知っている顔もあった。
「む……君は御柱君じゃないか！　やはり受かっていたんだな」

背を真っ直ぐ伸ばしたいい姿勢で話しかけてきた、眼鏡をかけている男子。
「あら、飯田君ですよね？　久しぶりですね」
「あ？　ンだてめぇは」
そっか。かっちゃんは知らないんでしたっけ。
「ほら、前に言った０ポイントを倒すときに協力してくれた人ですよ」
「うむ！　ぼ……俺は聡明中学から来た飯田天哉だ。君は御柱君の友達かい？　よろしく頼む」
「聡明～？　クソエリートじゃねぇか。ブッ殺しがいがありそうだな！」
「ブッコロシガイ!?　君本当にヒーロー志望なのか!?」
「あはは……」
なんとなく朝からこうなるんじゃないかと予想していた桜は、目の前のやり取りに思わず苦笑する。
「足を机の上にのせるんじゃない！　製作者や雄英の先輩方に申し訳ないとは思わないのか!?」
「はっ！　思わねぇな！」
やっぱり入学初日から全快ですね、かっちゃんは。
初日からかなり目立っている二人だが、しばらくすると飯田が桜に声をかけた。

「御柱君、君は本当に爆豪君と友達なのかい？　失礼だが少し信じられなくてな……」
「まあ気持ちは分かります。かっちゃんの『ブッ殺す』は『よろしく』と同じ意味なので……」
「そうなのか！　……すまない爆豪君。君の意図を汲んでやれなかったようだ……」
「適当こいてんじゃねぇ！」
そんなやり取りが続き、始業まであと少しとなったところで、不意に桜の視界の端に黒いなにかが映った。
開けたままの教室の扉。その前の廊下で黒い何かがもぞもぞと動いている。
「かっちゃん、あれなんですかね」
「ああ？　……ブッ殺すか」
「……ほどほどに抑えて下さいね」
「御柱君!?」
教室にいる他の生徒たちも徐々に気付き始め、教室がシンと静かになった。
「仲良しごっこがしたいなら他所でやれ」
それを確認した黒い何かは顔を出し、携帯ゼリー飲料を取りだして即座に飲み干す。
「はい、君たちが静になるまで8秒かかりました。時間は有限、君たちは合理性に欠けるね」

黒い何かからもぞもぞと這い出てきた男性は教卓の前に立ち、呆然とする生徒に向かって告げる。
「俺は相澤消太、このクラスの担任だ。一年間よろしくね」
どうやら黒い何か――彼は担任だったらしい
「早速だがお前ら、これ着てグラウンドに出ろ」
「ちょっと待ってください相澤先生！　入学式は？　ガイダンスは!?」
教室のどこかで男子の戸惑う声が聞こえる。
それに対して相澤先生の反応は、あくまで冷静で、表情一つ変えずに淡々と告げる。
「雄英の校風は『自由』。それは教師も例外じゃあないってことだ」
そして教室から去っていった。